

「女性科学者に明るい未来をの会」 設立の経緯

「女性科学者に明るい未来をの会」は、1980年に創設された。創設者である猿橋勝子先生は、気象研究所在職中にアメリカによるビキニ環礁核実験後の死の灰の分析など卓越した研究をされ、1980年4月に同所を地球化学研究部長で定年退官された。退官記念パーティーには250余人が集まり、この時、先輩、同僚、友人等から500万円の寄付金が集まった。猿橋先生は、この500万円を基金として、「女性科学者に明るい未来をの会」を創設された。

設立の趣旨は、立派な研究業績をあげていても、女性なるが故に低い地位に置かれている女性科学者の未来に一条の光を当てることであった。会の主な事業は、優れた研究業績を挙げた自然科学分野の50歳未満の女性研究者に学術賞（猿橋賞）を贈呈することである。50歳未満としているのは、その後定年までのおよそ10年研究の更なる発展を期することは勿論のこと、後進を育てることに尽力して欲しいという願いが込められている。自然科学分野の学会や個人から推薦された候補者について、選考委員会で慎重な選考が行われ、毎年一人が選ばれ、毎年、5月下旬の土曜日に東京・霞ヶ関ビルの東海大学校友会館で授賞式が行われる。

「女性科学者に明るい未来をの会」は、1980年10月16日に東京・本郷の学士会館分館で発会した。会長には、猿橋先生の帝国女子理専時代の恩師であり、女子高等教育の先覚者である湯浅明氏（東大名誉教授）が、副会長には幾瀬マサ氏（東邦大教授）氏が任命された。理事には不破敬一郎氏（東大名誉教授）、中村政雄（読売新聞社）等、各専門分野から代表的な科学者やマスコミ関係の15名が迎えられ、猿橋先生は、専務理事に就任された。顧問としては、三宅康雄氏等学界の長老17名が迎えられた。この会の設立を積極的に勧めたのは、恩師の三宅康雄氏であり、同会の命名、運営等にも積極的に協力した。また、この事業を広く社会に理解してもらい、あわせて財政への協力をお願いするために、賛助会員制度が設けられた。

湯浅明会長が1980年10月に執筆された「創立の趣旨」は、本会の10周年記念誌「女性科学者に明るい未来を」（湯浅明、猿橋勝子著、ドメス出版、1990年）の冒頭に3ページにわたって記されている。その一部を次に引用する。

『人間には男女の別があるが、これは生物学的なもので、人間としての男女の能力には、少しも本質的な差はない。（中略）

女性科学者数は、総数においても比率においてもきわめて低いとはいえ、幾多優秀な科学者をだした。また、女性の科学的知識レベルも向上し、国民生活の大きな基盤となっている。私たちは、女性科学者のもつ、きわめて高い潜在能力を信じ、それに大きい期待を寄せている。また私たちは、わが国の自然科学の今後の発展が女性科学者の活動に依存することが極めて大きいと考えている。そして現在、女性科学者のおかれている状況の暗さのなかに、一条の光を投げ、いくらかでも彼女らを励まし、自然科学の発展に貢献できるように支援することができればと願っている。

幸いにして、今春、気象研究所地球化学研究部長を定年で退官された猿橋勝子博士が、退官記念事業の一環として、友人・先輩からよせられた寄付金500万円の全額を、その目的のために提供されたので、とりあえず、それを当初の

基金として「女性科学者に明るい未来をの会」を設立し、その事業として「学術賞」（猿橋賞）を優れた業績をあげた女性科学者に贈呈することにしたものである。何とぞ本会設立の趣旨をご理解のうえ、本会の育成発展にご協力をお願いするとともに、今後一人でも多くの女性科学者を励ますことができるよう、格別のご支援を賜りたい。』

発会式の閉会の辞で、山田翠理事（日大理工学部助教授）は次のように述べており、当時の女性科学者の状況をよく示している。

「本日、この会が創立されたことは、私も一人の女性科学者として、言葉には言い表せないほどの熱くて、深い感激をもって、心から嬉しく思っております。本会の今後の発展には、はかり知れない希望と期待が寄せられています。

女性科学者の置かれている地位は大変くらいといいましょうか、明るい未来が欲しくて、欲しくて、探し求めているけれども、どこにも見つからないというのが、平均的現状ではないかと思えます。大部分の人は真暗闇の中で、トンネルの出口が見えないまま、壁を伝わってわずかずつ前進したり、あるいはレールの上を手探りで転げながら、何とか歩を進めているのが現状です。

一人でも多くの女性科学者に明るい未来を迎えてもらうよう、また今後この道を歩もうとする女子学生にも、明るい未来への希望を与えてほしいと念じています。 後略 」

専務理事として裏方の仕事に徹していた猿橋先生は、猿橋賞を将来にわたって確実に続けられるようにと、文部省（現文部科学省）から公益信託の許可を受けるために奔走された。その結果、1990年3月13日に「公益信託・女性自然科学者支援基金」が文科省で認可された。同時に、40歳未満の女性研究者が海外での国際会議に出席するための旅費を援助する研究助成も開始した。この支援基金は、猿橋先生ご自身の1500万円で発足し、追って、府立第六高女（現都立三田高校）同級生の井口国子氏からの1500万円、恩師三宅康雄氏250万円等のご寄付が追加信託され、これらの方々の高額の寄付があったことを忘れることはできない。公益信託金は多いときは3000万円を越え、現在猿橋賞の賞金はここから支出されている。その後も、藤原康子氏、新井田直美氏、藤野冷子氏等、猿橋先生の事業に賛同して、高額の寄付をしてくださる方が続いている。

猿橋先生の志に基づく事業を支えたのは、帝国女子理専の同窓生および気象研究所の同僚や後輩であった。帝国女子理専の同窓生は、高額の寄付をして事業を支援した。気象研究所の仲間達は、事務および運営面で事業を支援した。桜井澄子氏は、気象研究所の後輩であるが、理専の同級生でもあり、事務局を手伝った。金沢照子氏は猿橋先生の片腕として、献身的に事業を支えた。猿橋先生の晩年に、事務局をきりもりしたのは、海洋研究部長を退官した鷺猛氏であった。

猿橋勝子先生は、定年退職後の1980年11月に女性初の学術会議会員として上位当選され、女性の地位向上のために尽くされた。そして、1981年10月には、第3回目のエイボン女性大賞を受賞された。受賞理由は「女性科学者の先駆として、地球化学の分野で、世界的に評価された優れた功績をあげ、女性の

地位向上と世界平和のために、国際的な活動を長年続けられていることに対して」と真ちゅう版の賞状にきざみこまれている。猿橋先生は、二回にわたる日中女性科学者シンポジウム（1992年、1994年）を成功させ、科学者であるだけでなく「フィロソファーであれ」と後輩を指導し続けられたが、2007年9月29日に肺炎のため87歳で他界された。「猿橋勝子先生を偲ぶ会」は、同年10月21日に、「女性科学者に明るい未来をの会」主催で、学士会館本館で行われた。祭壇には、皇后陛下美智子様からの花かごが添えられていた。

「女性科学者に明るい未来をの会」の事業

女性科学者に明るい未来をの会の理事会メンバーは、発足の時とかなり変わっているが、物理、化学、生物、数学、地球化学等の自然科学の分野をカバーすると同時に、マスコミの主要な新聞社の委員から構成されている。理事会では、賞選考委員会の報告を受け、猿橋賞受賞者を決定すると共に、会の事業を企画、実行している。

「女性科学者に明るい未来をの会」の主要な事業は、猿橋賞の授与である。その他に、記念誌の出版と記念シンポジウムが挙げられる。それらの概要を次に示す。

1) 猿橋賞の授賞

第1回の受賞者として、1981年5月に国立遺伝学研究所室長の太田朋子氏が選ばれた。その後、毎年一人の優れた業績をあげた女性科学者が猿橋賞を受賞しており、今年（2018年）で38人を数えるに至った。猿橋賞を受賞した人達は、いずれも大きな励ましを受け、各分野で目覚ましい活躍をしている。大型研究のリーダーになり、他の大きな賞を受賞し、学会長になるなど、後進の立派なお手本となって、猿橋先生の期待に答えている。

例えば、第1回受賞者の太田朋子氏は、進化の分子的基礎「ほぼ中立説」を提唱し、後にエイボン女性大賞を受賞し、女性初のアメリカ科学アカデミー会員となり、文化勲章を顕彰された。また、第4回受賞者の米沢富美子氏はアモルファスに関する独創的な研究が評価されて、エイボン女性大賞、ロレアル・ユネスコ女性科学者賞（国際賞）を受賞し、学術会議会員、女性初の日本物理学会会長として活躍した。第9回受賞者の石田瑞穂氏は、地震の研究が評価されて、紫綬褒章を受章し、学術会議会員、女性初の地震学会会長として活躍した。さらに、第13回受賞者の黒田玲子氏はキラリティー研究の第一人者であるが、学術会議会員、総合科学技術会議議員として政府の政策立案に大きく貢献するだけでなく、国際科学会儀（ICSU）の副会長として、国際的な学術の促進と発展のために活躍している。輝かしく活躍する先達に続く受賞者たちも、紫綬褒章をはじめ、多くの国際賞に推されるなど、確固たる成果を出し続けている。

なお、海外の国際学会で研究発表をする40歳未満の女性研究者を対象として、1990年～2005年の間、研究助成金（2004と2005年は研究奨励賞と名称変更）が出された。受賞者には、国際学会への参加補助費として10万円が支給された。

猿橋賞が発足した1980年当時には、女性科学者の研究を支援する雰囲気はな

く、無視されていたといっても過言ではない。そういう時代に、猿橋先生は年金生活に入ってから、女性科学者を励ますために私費で猿橋賞を創設されたのである。猿橋賞を受賞した人は、その後、昇進したり、研究助成金を取りやすくなったり、研究を大きく発展させている。そして、猿橋賞という信用のお陰で、各種の委員や代表を仰せつかることになる。いつの間にか「猿橋効果」という言葉が生まれた。猿橋賞について、受賞者は次のように語っている。

「人生を変えてくれた」

「生き方を示してくれた」

「泥沼でもがしていたところを、助け起こしてくれた」

「勇気と自信を与えてくれた」

若い女性研究者は、苦しい中でも猿橋賞を目指して頑張っており、一条の光は明るく輝き続けている。

2) 記念誌の出版

猿橋賞の発足から10年目、15年目、20年目に猿橋先生のリーダーシップにより、記念する本が出版された。猿橋先生亡き後は、受賞者の協力により「猿橋勝子という生き方」という本が出版され、好評を博している。

10周年記念 「女性科学者に明るい未来を」

湯浅明、猿橋勝子ほか著、ドメス出版、1990.

15周年記念 「女性科学者 21世紀へのメッセージ」

湯浅明、猿橋勝子編、ドメス出版、1996.

20周年記念 「My Life」 Twenty Japanese Women Scientists (英文)

古在、川島、富永、久留、猿橋編、内田老鶴圃、2001.

受賞者20名の研究者としての人生を綴った全編英文のエッセイ集。国内外の図書館にも広く寄贈された。美智子皇后陛下のお励ましに対し、謝辞が述べられている。

30周年記念

「猿橋勝子という生き方」 岩波科学ライブラリー157

米沢富美子著、岩波書店、2009.

猿橋先生の科学者としての業績に焦点をあててまとめられた。

特に、二酸化炭素の水中での挙動の研究における微量拡散分析装置の作成と「サルハシの表」と称せられる便覧を作成し国際的に高く評価されたこと、および死の灰の分析に当たってアメリカの代表・フォルサムと分析競争をして勝利したことなど、手に汗を握る物語となっている。

「女性科学者に一条の光を、猿橋賞30年の軌跡」

女性科学者に明るい未来をの会編、ドメス出版、2010.

40周年記念

「私の科学者ライフ—猿橋賞受賞者からのメッセージに向けて—」

女性科学者に明るい未来をの会編、日本評論社、2021.

第21～40回受賞者の科学者としての人生を綴ったエッセイ集。